

「清紫会」だより

- ◆第152回 平成二十九年二月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・鮎ののり巻／小野澤繁雄・昔ながらの／松井淑子・仕掛け人は誰か
- ◆第153回 三月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉小野澤繁雄・みていないこと／林博子・ひかりの春
- ◆第154回 四月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階C会議室
〈提出作品〉市川茂子・黒たまご漬け／小野澤繁雄・インソール／林博子・千鳥ヶ淵／松井淑子・落書き

無二の会短信

◆三月十日、三男の弟が日赤病院に救急搬送される途中に電話があった。脑梗塞らしいとのこと。妻を亡くして、二人の息子達は離れていて独り暮りで心配なので、すぐに駆け付けた。早く処置出来たので重症にならないだろうと聞いて少し安心したが、リハビリが長く続くのではと覚悟をする。四月末になって、老人会の会長を引き受けてくれたT氏が胃癌で入院の知らせがあり、副会長にもどったのに、また多忙な仕事となり、短歌に向き合う時間が少なくなった。それでも、作歌の完成が早いほうではないので、悩みの種ではある。

池田桂一

◆晴天の穏やかな昼過ぎ、急に風が出てぼつぼつと雨粒が飛んで来た。傘をもたずに出たが、日照り雨だからすぐ止みそうだ。反対側を見たら、ビルとビルにかけ橋のように虹が架かっている。七色がはっきりわかるような、うす紫色があざやかに見える。絵本にでている虹や、遠い日の自然で見た思い出ぐらいで、こんなに近くで見ることがなかったので、郷愁を感じる一瞬だった。

市川茂子

◆定年後、非常勤の二年を経過した後で一年が経過した。父が亡くなった年齢（六十八歳）になっている。やっと属性で無職とする（ブックオフに本を持ち込んでも、チェック欄がある）にも慣れたようだ。無職には違いないのだった。全体に時間があるようなところ、それでも用のあるような日程がすぐくるよ

うなのが不思議だ。

小野澤繁雄

◆家の小さな庭の福寿草が開花した。若干の早い遅いはあるものの、相談したかのように咲き始めるにはびっくりさせられる。福寿草は土を嫌うらしく、移植して増やそうとすると失せてしまうことがよくあるらしい。どこからか持って来て移植しようなどと考えないで、咲いてある場所に出向いてゆっくり鑑賞するのがいい鑑賞方法のようである。

神村ふじを

◆四月十二日、前日の雨と雪とは真逆の晴天に恵まれ、あずさ号で北杜市に向かった。中央本線の小淵沢駅の一つ手前の無人駅の長坂で、迎えの車に乗り、熱那神社あつなに着いた。ここには昭和九年生まれの歌人の会の先輩の歌碑があり、建立から十年目の顕彰会が行われた。神道に則り厳かな式次に執り行われた。式が終わって周囲を見渡すと、右には八ヶ岳連峰、左には南アルプス連峰、一際美しく甲斐駒ヶ岳が聳えている。山女だった私には望外の賜物であった。

河村郁子

◆待ちに待った春がやってきました。なんとなく胸ふくらむ季節となり、毎日嬉しく思っています。高齡となり、そろそろ終活を始めなければと思っております。

谷垣満壽子

◆今年二月下旬に、日本自然保護協会から山形県自然保護団体協議会に書類が届いた。私の住む西置賜郡は飯豊町の民有林六百ヘクタールに、東京の会社が大规模太陽光発電所を造る計画がある、という内容だった。この情報は、環境エネルギー政策研究所長の飯田哲也さんからのものという。私はびっくりして、すぐに山形新聞長井支社に取材の依頼をした。

山形新聞は、聞いたこともないし余りに規模が大きいのので半信半疑だったが、飯豊町や実施主体に問い合わせ、三月十五日掲載した。町も県も反対している。水源涵養保安林、土砂流出防備保安林を破壊して大都市への電力を作るのは許せない。自然エネルギーには良いものと悪いものがある、と飯田さんも言っている。

新野祐子

◆二十数年振りに日光に出かけた。今年は東照宮の陽明門の修復が完了したとあって、そのせいか観光客が格別に多いようだ。しかも大部分は外国人で、欧米人ばかりではない。日本人かと思っていると、中国語や韓国語らしき言葉も聞こえてくる。それに対応するために、東照宮の神職らしき人も売店の人も英語。市内のバスの中の説明文やアナウンスは英語、中国語、韓国語。外国人観光客がふえているとは聞いていたが、これほどとは思わなかった。

松井淑子

◆病院へ行った帰り道、いろいろな花を育てている角の家の女性に、「いつもお花がきれいですね」「ありがとう」。顔はお互いに見知ってはいるが、言葉をかわしたことはなかった。そう言って通りすぎたが、すぐ呼びとめられた。「これどうぞ」。育てているミニバラを一枝下さるという。「どうして?」「褒められたから嬉しくて」。こちらも思いがけないことで嬉しくなった。早速、花びんに挿して喜んでいる。思いがけないことはもう一つ。咲いている花の後から蕾が三つものぞいていて、しばらく楽しめそうだ。

丸山弘子

◆札幌での生活が始まり、少しずついろいろなことが順調にまわり始めた。ただひとつ、物足りないのは苦小牧の空や景色を見ることができなくなったこと。同じ北海道でも都会と田舎の違いだろうか。苦小牧を車で走っていると、地球の美しさをごく自然に感じるようになってきた。それは天候によらず、ほぼ毎日。私は車の中で感嘆の声をあげていた。心の動きがやや鈍くなってしまったのは、少し残念なこと。

山内裕子

◆この連休を利用して、三十何年かぶりに奈良から室生寺をめぐってきた。ちょうど花の季節で、長谷寺の牡丹、室生寺の石楠花が見ごろであった。奈良の古き仏たちにも会え、道々古代史が立ち返ってくる思いがした。この時期の旅はむしろ避けていたのだが、思ったほどの混雑はなく、けむるような若葉に濯がれる思いの旅であった。

結城 文

◆バラの季節がきた。ひろ子バラも咲いた。丈一メートル、深紅。大輪ではない。原産と聞いているから「わらべが見た野なかのバラ」が先祖かもしれない。数えてみたら花の数は七十以上あった。

十年前、仙台の若い友達・博子から、大きいダンボール箱が届いた。既に花の終わった二十センチのバラの枝が五本出てきた。

二十代の博子は、アムネスティで死刑廃止運動をけん命にしていた。当時は勤めのかたわら路上生活の人たちの支援を一心に続けている。言葉はきびしいけれど、実はやさしい彼女を私は好きであった。趣味と言えるかどうかかわからないが、あと一つ彼女の好きなことは原産のバラを育てること。万事に大ざっぱな私にもバラを育てる喜びをわかってもらおうとしたにちがいない。きつとうまく行かないよと思いが

ら、私は鉢に土を入れ小枝五本を刺した。その頃、私は病気の長女と二人で暮らしていた。友達三人と十日間シルクロードへの旅がきまった時、私は娘にくりかえした。わざわざ博子さんが送ってくれたバラに水やりを忘れないでよ。バラは生きながらえた。娘の好きな花はバラではなく、ひな菊やすみれのような細かい花だったけれど。

二〇一一年冬、博子さん六十歳、二年後初夏、長女五十二歳でどっちも急逝した。最後まで一つのちのように仲良く、姓だけ共にしなかった博子さんのつれあいから、アパートの窓下のせまい地面で、彼女が二百種の原産バラを育てていたことを聞いた。もらったバラの鉢を軒下に放り出したまま、私はそれを忘れた。ある日、草むしりをたのんだ若者が、息たえだえながら生きていた二つのバラを庭の地面におろしてくれた。ひろ子バラはぐんぐん育って翌年、蕾をつけた。花の中に博子さんと長女がいるとは思えない。でもバラの今日のいのちを支えてくれたのは娘と博子さんだ。毎朝花に会うたびに二人を思う。

河内愛子